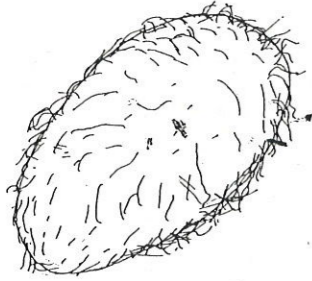


すっかんぽ

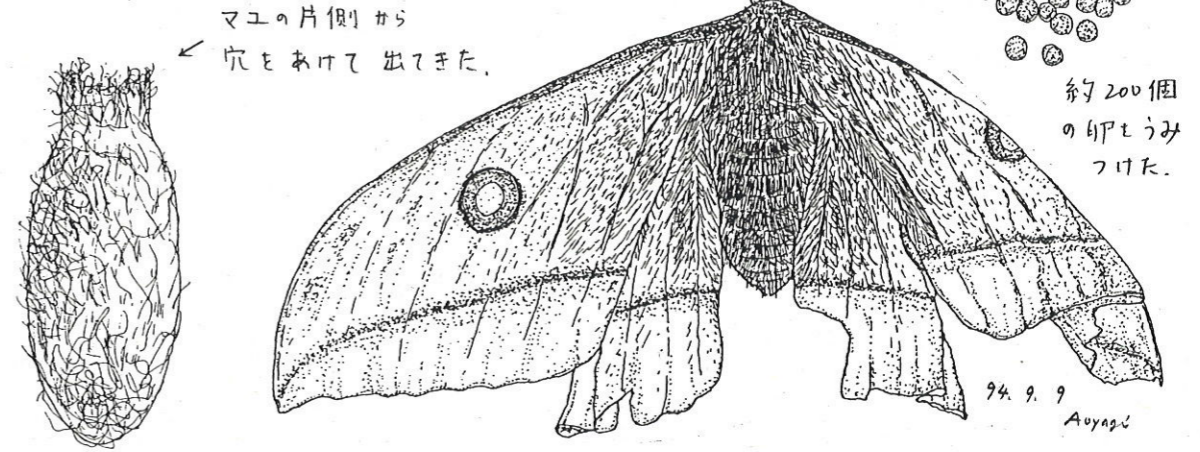
1994年 9月号



緑色の繭

「家の庭にカイコがマユもつく、たんです。」
 8月5日の登校日、帰ろうとしていると、いきなり、スー伯のO君に呼ばとめられた。「なに、庭にカイコがマユも……？」
 次の日、O君は、眼もキラキラと輝かせ、一つのマユを手わたしてくれた。確かに、形といい、大きさといい、カイコのマユそっくりだ。しかし、色は鮮やかな緑色なのである。私は、小学生の時、夏休みの理科研究で『カイコの一生』をテーマに選んで、カイコの生きざまを密着取材した経験があった。そのためか、「大々君、珍しいカイコのマユおりがとう！」とさわやかに別れることはできなかつたのである。
 何人かの先生に見てもらったが、「飼っていたカイコが逃げだして野生化したのでは。」という説や「蛍光ペンで色を塗ったんじゃないかしら」という独創的な説が飛びかた。
 数日後、本屋で昆虫図鑑をパラパラとめくっていると、あの緑色のマユの写真が目にとまった。やはり、マユからでてくるのはカイコではなく、ヤマユガという巨大な蛾であったのだ。私はプラスチックの容器にマユを入れて、成虫がでてくるのを心待ちにしていた。しかし、1ヶ月たっても、何の変化もなかった。「こりゃ、死んでるのかも」すでに、半分はあきらめかけていた。

9月9日の朝、ネクタイをしめていると、マユを入れていた容器の中に、茶色い葉っぱのようなものが動いていた。
 「ついにでてきたか」翅はまだのびき、ていなかたが、それは、確かに、ヤマユガの成虫であった。しかも腹部には卵がつま、っているせいか、信じられないくらいパンパンに膨れていた。翅を広げると15センチ近くは、ある。これだけの体が、よく、この小さなマユの中に収まっていたもんだ。



※ 動くものに目がない美緒(8ヶ月児)に、もし先にみつかっていたら、今ごろ、軽く、ひとひねりされていたろう。

このヤマユガのマユからは、実は、カイコの糸より、太くて伸縮性に富み、優美な光沢を持つ絹糸が取れるのである。ただ、カイコとちがって、家の中で飼育することができません。エサとなる食樹全体を網で囲って、その中で飼育するのである。昔は、各地で飼育されていたらしいが、手間がかかることから、今では、八丈島や、長野県の一地方だけに残されているだけだそうだ。また、民間薬としても、幼虫を煎じて子供の下熱剤にしたり、幼虫やさなぎ、成虫も焼いて子供の疥癬の虫の薬にも用いたそうである。

かつては、人間が、さかんに利用していたが、自分では飛ぶこともできないほど家畜化されてしまったカイコとは、違って、そうやすやすと、人間の言いなりにはならないぞという野性味が、ヤマユガには、感じられた。

